



慶應義塾大学ビジネス・スクール

日本ミネチュアベアリング株式会社(A)

—1979年までの成長過程—

創業期

日本ミネチュアベアリング(以後NMB)株式会社は、1951年7月に、富永五郎氏が、東京都板橋区小豆沢に、日本で最初に極小ベアリングの製造を目的として設立した会社(資本金1百万円)であった。ところが、1952年7月、当時実質的な社長であった富永氏が、日本航空整備株式会社の設立にあたって、請われて、その取締役に就任した。ところで、高橋高見氏の父親の高橋精一郎氏は、啓愛社(1925年創立)という鉄屑取引の会社を経営しており、この取引の関係で日産自動車に出入りしていた。このような関係から、高橋精一郎氏は、日産コンツェルンの総師であった鮎川氏の意向を受けた日産自動車の元社長の村山氏に頼まれて、1952年8月、この会社の社長を引き受けるとともに、資金援助をすることになった。その後、板橋区小豆沢の工場も手狭になり、1956年には、工場を川口市に移転した。しかし、2年近く、兼務の形をとりながら、NMBの実質的な経営にあっていた富永氏が、1959年4月、NMBの取締役の資格のまま日本航空整備の常務として、そちらの仕事に専念することになった。これを契機に、高橋精一郎氏は、長男の高橋高見氏に、NMBの経営を実質的に委ねることにした。

高橋高見氏(現社長)のNMB経営への参加

高橋高見氏は、1928年12月に、高橋精一郎氏の長男として、東京に生まれた。慶應義塾大学経済学部で学び、在学中には、経済学部自治会長を務めるとともに、六大学野球の応援団長として活躍した。高橋氏の考案したミッキーマウスやセーター・スタイルは、その後長く慶應義塾大学の応援スタイルとして引き継がれていた。また、学生時代には、養豚業を始めたり、米軍用食堂の地下に溜まった油を石鹼原料として販売するなど、事業家としての天分を示していた。大学卒業後の1951年4月には当時の優良企業の鐘紡に入社し、最初にエリート・コースの人事・労務畑に配置され、彦根工場女子寮の舎監を務めた。この時、彦根工場労働組合の副組合長に推され、1954年6月に起きた近江絹糸の人権争議を先頭にたって支援した。

1959年3月、当時31歳であった高橋高見氏は、8年間勤めた鐘紡を退職し、町工場の

このケースは、慶應義塾大学ビジネス・スクール助教鈴木貞彦がクラス討議のために作成したものである。このケースは経営の巧拙を例示するためのものではない。(1985年9月作成)